

研究種目：基礎研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520008

研究課題名（和文）：生命操作時代における「責任意識」と「規範形成」の感情論的基礎づけ
研究課題名（英文）：

A philosophical foundation for social responsibility and normality in life-splicing era from the emotional point of view

研究代表者：森下 直貴（MORISHITA NAOKI）

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：70200409

研究成果の概要：

研究テーマは、社会の＜倫理的ネットワーク＞の構築である。平成 18 年度はその基礎づけとして、感情論的視点から「規範意識」の生成を研究し、19 年度には「倫理」の基盤として「常識」の成り立ちと構造を研究した。そのさい、時代と世代の視点を導入し、死生観と昭和思想の研究を通じて、常識において＜変わるもの＞と＜変わらないもの＞とを浮き上がらせた。そして最終の 20 年度には常識の「人類的基盤」の研究に着手した。以上の成果をふまえて、＜倫理ネットワーク＞の理論の構築のための土台、つまり、人類的条件＝形成力/原形＝基準/基本制度/特定の全体社会からなる歴史的社会的論理構造、ならびに、＜もの＞の形而上学・倫理学の根本、を固めることができた。さらにまた、規範の運用を相互的に牽制し合う＜倫理的ネットワーク＞だけでなく、＜コンセンサス＞形成の大筋も明瞭になることによって、この両者を（現場での＜コンセント＞をも含めて）包括するような倫理学の公共的地平、いわば「公共倫理学」の構想が新たに浮かび上がってきた。目下、「コモンセンスからコンセンサスへ」という方向で、引き続き「公共倫理学」の基礎づけに取り組んでいる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,500,000	0	1,500,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	450,000	3,450,000

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：コモンセンス、コンセンサス、倫理的ネットワーク、生命倫理、死生観、昭和思想、人類的基盤、公共倫理学

1. 研究開始当初の背景

生命操作時代（グローバル化、デジタルメディア、ポストモダン）の今日、生命をめぐる科学技術・市場・国家・欲望を巻き込んだ複合運動が進行するなかで、倫理の反省という営み＝倫理学は、現実（リアリティ）の動きに取り残され、そこから乖離・遊離し、改めてその存在意義を根底から問い直されている。倫理学の現実性（アクチュアリティ）を回復させることこそ、いま焦眉の根本課題となっている。

2. 研究の目的

上記の課題に応えるために、既成事実との安易な妥協やその追認のうちその現実化を求めるのではなく、むしろ、多様な経営体・組織・団体・政府・市民社会・個々人のあいだに張り巡らされる、「社会的責任」を軸とした情報公開・監査・評価・監視といった社会的相互評価の働き合いが、重要な論点として浮かび上がる。これについては従来ほとんど理論化された例がない。このような見地から本研究では、＜倫理的ネットワーク＞を構築するための基礎理論を目指す。

3. 研究の方法

まず、社会規範の生成という視点から、生命論・宗教論・社会哲学にかかわる原理的考察を積み重ねた。これは主に文献の研究をつうじて行った。続いて、現代日本社会の実際の運動とこの内部で増殖している文化論・大衆論・文明論を精査しながら、常識つまり世間的評価システムの構造と変容を捉えた。このために、文献研究とともに、海外の現地調査や、海外の研究者との意見交換を試みた。以上をふまえて、常識のなかに＜倫理的ネットワーク＞を位置づけることによって、このネットワークの担い手として個々人の＜主体性＞を捉え直す方向で、総合的な考察を進めた。

4. 研究成果

初年度には、社会規範の生成という視点から、社会哲学と宗教論にかかわる原理的考察を以下の三つの方面に渡って展開した。

(1) 社会および国家と規範との結びつきに関して、プラトンやヘーゲルの国家論とともに、とりわけホッブズの国家論の研究を行った。ことにホッブズでは、最新の研究知見をふまえつつ、権力・権威と宗教との関係、自由と必然との関係をめぐって独自の見解を得た。また、ヘーゲル以降の展開を考慮してフランス現代思想の一部（ドゥルーズの欲望・資本主義論）をも視野に収めた。(2) 宗教と社会規範との結びつきに関して、ルター以降の宗教論を辿り直しつつ、とくにフォイエルバッハの宗教論を検討した。またこれと併せて、インドの社会・宗教・文明を考察に組み込む必要を感じ、インドの現地調査を試みた。(3) 近代日本人における規範意識・無意識に関して、近代日本の文学・思想（とくに伊藤整、戸坂潤、三木清ほか）を研究し、今日まで「日本人の伝統的な宗教性」として受け継がれている近代日本人の思惟様式とその「教養」の原型を把握した。

以上の三方面の考察を通じて、（生命論に関してすでに得ていた）＜安らぎ＞（自己身体の底点）という条件に加え、＜済まなさ＞（宗教性・根底的第三者性）および社会的相互評価（水平的第三者性）という二つの第三者性を、社会規範の根本条件として新たに析出することができた。

次年度では、「常識」の構造と変容プロセスを考察した。具体的には、ものと情報と人が境界を越えて交流し合う「グローバル世界」が到来するとき、「常識」において何が変化し、変化のなかで何が持続するかを見極めるために、三つの視角から考察を進めた。

(1) 生命倫理・医療倫理のケースをめぐって、とくに終末期医療のうちにコンセンサスとコモンスセンスのつながりを探ることをとおして、最小限主義の倫理の必要性を唱えた。

(2) 日本人の現在の死生感に関しては、とくに世代論を重視し、時代論を背景におきながら、日本人のあいだには現在、世代ごとに異なる三つの常識（生と死の感じ方）が混在していることを浮き彫りにし、それを考慮することなしにはコンセンサスを論じることができない点を明らかにした。(3) 昭和思想論では、昭和という時代を近代化・グローバル化のうちに位置づけつつ、世界思想史の視

野のなかで、後期西田哲学から三木清と戸坂潤につながる思考の流れを、グローバルな世界に通じる<ものの思考>として特徴づけた。それは同時に、日本文化の底流と人類学的原形とのコンセンサス的な結びつきを示すものでもある。この点を中国、アメリカ、スウェーデンに赴き、当地の学者たちと議論するなかで確認し、<虫の視点>という形で具体化してきた。

最終年度では、研究全体のテーマである社会の<倫理的ネットワーク>の構築へ向けて理論的な考察を試みた。

まず、(1) 西洋と日本における常識の基盤の比較研究を試みた。4月から5月にかけてスウェーデンで在外研究(招聘教授)を行い、また、「ナノエシックス」の哲学的基礎づけをめぐる考察を契機にして、西洋社会における思想の布置状況と、その拠り所である「人間主義」の特徴とを抽出した。他方で、現代日本における思想状況とその拠り所としての「アニミズム」を確認した。そこから次に、

(2) 人類共通の原初的な世界経験の解明に取り組み、経験と制度の絡み合いの具体的素材として、死生感の変容と並走する家族=親密な関係の変容について考察を試みた。そのさい、構造人類学(野生の思考、神話論理)を考慮した。以上をふまえて、(3) 社会の形成論理を考察し、以下のような見通しを得た。すなわち、人類的な基礎条件(=社会形成力)、社会的関係の規準となる原形(=社会の原制度/原正義)、原形によって支えられる特定社会の基本制度、それに、基本制度を土台として成り立つ特定の全体社会、の四水準である。そして、以上の論理に<もの>の形而上学を組み込むことによって、それぞれの水準を具体的に把握することができた。けっきょく、原形(原制度/原正義)という規準は、好意・負い目の返し合いに第三者的中立性が結びつくことによって、親近性と敵対性とのあいだで不断に「友好性」という中間を実現するように働くのである。

以上の成果に立って、<倫理ネットワーク>論の理論構築のための土台を固めることができた。またさらに、相互的牽制のための<倫理的ネットワーク>だけでなく、<コンセンサス>の形成の大筋も明瞭になることによって、この両者を包括するような「公共倫理学」の構想が浮かび上がってきた。今後は「コンセンサスからコンセンサスへ」という方向で、公共倫理学の基礎づけに取り組みたいと考えている(すでに著作の準備を進めている)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 8 件)

1. 長尾式子、森下直貴他「日本の卒後臨床研修における倫理教育の現状」、医学教育 (日本医学教育学会) 37 (4) : 215-220、2006.
2. 森下直貴「インドへの旅、そしてインドからの旅」、浜松医科大学 NEWSLETTER 33(2) : 34-37、2007.
3. 森下直貴「終末期における「臨床的現実」—<思いやり>と<決まり>の根源」、哲学 (日本哲学会) 58 : 97-114、2007.
4. 森下直貴「<無形のものたち>のリアリティー—日本人の死生感の現在」、死生学特集号 (東京大学大学院人文社会系研究科) 57-79、2009.
5. 森下直貴「「デーミウルゴス」的主体性とその他方—J.-P. デュピュイの「ナノエシックス」の哲学的基礎づけをめぐる」、生存研究 B (生存科学研究所)、2009 (印刷中) .
6. 森下直貴「書評/『入門・医療倫理 I・II』」、ニューズレター (日本生命倫理学会) 36 : 5-6、2007.
7. 森下直貴「書評/永遠の絶滅収容所 動物虐待とホロコースト」図書新聞 2839 : 3-3、2007.
8. 森下直貴「石井先生を偲んで」、医学哲学 医学倫理 24、2006.

[学会発表] (計 13 件)

1. 森下直貴「研究会の課題、日本医学哲学・倫理学会、臨床倫理・ケア研究会、上智大学、2006. 10. 1.
2. 森下直貴「終末期の選択をめぐる倫理—ロールズでもブーバーでもない語り方」、全国唯物論研究協会/分科会シンポジウム報告、2006. 10. 22.
3. 森下直貴「伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』を読む」、名古屋哲学研究会 (日本思想史部会)、2006. 12. 9.
4. 森下直貴「終末期における「臨床的現実」—<決まり>と<思いやり>の根源」、日本哲学会第 66 回大会/共同討議 2、千葉大学、2007. 5. 19.
5. 森下直貴「終末期医療をめぐる最近の動き—哲学者の役割を中心に」、中部生命倫理研究会、名古屋市立大学、2007. 6. 9
6. 森下直貴「構想/常識と<ものの思考>—西田・三木・戸坂の思想を貫くもの」、名古屋哲学会 (日本思想史部会)、名古屋市立大学、2007. 11. 23
7. 森下直貴「<無形のもの>たちのリアリティー—日本人の死生感の現在」、日中国際研究会議/東アジアの死生学へ、北京、2008. 2. 18.

8. MORISHITA, N: What is Reality? Zen & Buddhism Seminar, University of Pennsylvania 2008. 3. 25.
9. MORISHITA, N : Different Feelings on Death and Life among Present Japanese People, Visiting Professor Seminar, Linköping University, Sweden, 2008. 4. 15.
10. MORISHITA, N: Common Sense & Consensus, Visiting Professor Seminar, Linköping University, Sweden, 2008. 4. 16.
11. 森下直貴 「デュピュイのナノエシックスの哲学的基礎づけ」生存研究所、2008. 10. 10.
12. 森下直貴 「バイオエシックスとコンセンサス—「人間主義」をめぐる—」、中部生命倫理研究会、08. 11. 1.
13. 森下直貴 「生命と回復—健康概念を中心に」、比較思想学会第36回大会、シンポジウム、09. 6. 13 (予定) .

[図書] (計5件)

1. 森下直貴 『生命倫理百科事典』全五巻、編集・分担翻訳、翻訳刊行編集委員会編、丸善出版、2007.
2. 森下直貴 『応用倫理事典』、項目執筆 (ケアリングの倫理、看護とウェルビーイング)、加藤尚武編、丸善、2008.
3. 森下直貴 『<昭和思想>新論—二十世紀思想史の試み』、第二章「西田・三木・戸坂の思想と<ものの思考>—「経験と制度」の歴史哲学への視座」執筆、津田雅夫編、文理閣、2009 (印刷中) .
4. 森下直貴 『増補新版・生命倫理事典』、編集委員、太陽出版、2009 (印刷中) .
5. 森下直貴 『シリーズ二十一世紀の社会哲学第1巻』、第1部「産み・結婚・看取りから見た家族の現在と未来」執筆、全国唯物論研究協会編、青木書店、2009年9月刊行予定.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森下直貴 (MORISHITA NAOKI)
浜松医科大学・医学部・教授
研究者番号：70200409

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし